

# 東禅寺から香取海へ

## — 中世のみち探訪 —

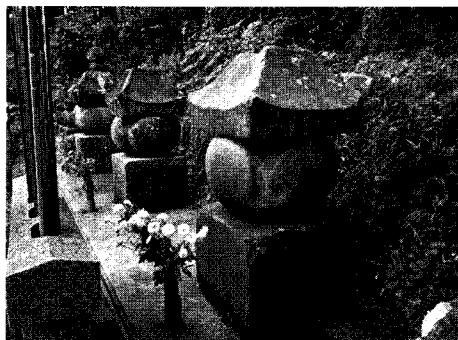
### はじめに

千葉県香取郡多古町には東禅寺という寺がある。同町は八日市場と成田市の中間に在り、南流し太平洋に注ぐ栗山川が流れ、その西岸にある寺である。鑑真創建とも伝え、そこには、本堂一字とかなり大きめの五輪塔複数基と宝篋印塔が残っている（写真a-1・2）。多古町の石造文化財は、中世のものであれば板碑がほとんどだが、これほど

の大きさの五輪塔がここにいくつも残っていること自体、この寺が当地域の中でも、何か特別な場所であったことを感じざすにはいられない。

神奈川県立金沢文庫特別展図録『鎌倉への海の道』<sup>(1)</sup>によれば東禅寺は、千田庄内に建立された千葉氏一族の氏寺で、称名寺の末寺であったとされる。そして同書では、東禅寺の役割・性格や、五輪塔の特色について次のように述べられている。

東禅寺の役割は、東禅寺の住持でのちに称名寺の住持と



a-1 東禅寺五輪塔



a-2 東禅寺宝篋印塔

鉈  
木  
沙  
織

なった湛睿の稿本の紙背文書から考えることができる。（中略）東禅寺は、称名寺領の利根川の河口に近い東庄上代郷（東庄町）等の年貢運搬の人配を行つたり、千光寺（大原町）等の房総の末寺から金沢・鎌倉への連絡にあたる寺院となっていた。東禅寺境内の五輪塔は、梵字のない五輪塔で様式としては律宗の様式をうけつぎながら

ら、石材は土地の凝灰岩の系統である。房総の律宗寺院の鎌倉とのつながりが見られる反面、江戸湾岸と相違して石材は土地のものである。流通路の連続と切れ目を見せている地といえよう。

このように、東禅寺は金沢・鎌倉と当地域をつなげる拠点的な役割を果たしていたことが想定できる。同寺がそのような性格をもっていたならば、ここと各地を結ぶ交通を具体的に明らかにすることも重要である。本稿では、東禅寺周辺の、主に陸上交通の一部についてみていく。

### 一 東禅寺周辺の陸上交通

嘉慶二年閏九月以降、東禅寺の住持となつた湛睿は、同寺と称名寺を頻繁に行き来している。<sup>(2)</sup> 湛睿はどのような交通手段を利用して、金沢や鎌倉と当地域の間を往来していたのだろうか。遠山成一「中世房総水運史に関する一考察—舟戸・船津地名をめぐって—」は、湛睿が称名寺に向かう手段として、①利根川（常陸川水系）にて、関宿を経て、江戸川（太日川水系）を下り、東京湾にでる。②利根川（常陸川水系）にて、印旛沼に入り鹿島川下流の津から、現在の国道五十一号線に相当する古道を千葉に向かい、千葉から内海を六浦に渡るという、二つの手段が考えられるとされる。①②ともに、東禅寺から北上して佐原近辺の港を利用したことを想定し、常陸川水系を利用することは共通している。また、遠山氏は、湛睿が東禅寺の前を南流する栗山川を利用し、同川を遡上して佐原方面に向かった可能性を指摘され、栗山川水系に展開した中世前期の河川交通の存在について論じられている。<sup>(4)</sup>

では、東禅寺周辺での交通は河川を利用したものばかりであったのだろうか。恐らくそうではないだろう。例えば金沢文庫文書中の某書状には「つちハシの御かた、みちハとちて候」とある。東禅寺は土橋山東禅寺といわれ、書状中において土橋は東禅寺を指す。<sup>(6)</sup> つまり、これは東禅寺周辺の道が当時塞がれていた状況を伝えたものと考えることができるものである。また次の「輪如書状」は前次であるが、「寺領」に関する内容となつていて、

### 〔史料二〕「輪如書状」

（前次）

寺領「　　」惣二丁八段六十歩「　　」一丁二段大ハ當知行候、一丁五段半ハ未知行候、此間一丁者古大路阿弥堂免ニテ候、五段半ハいつくとも在所不分明候、雖相尋候、未得知候、又次浦ニ一段小候、是も在所を知人なく候、此外散在仏神領、  
（後次）<sup>(7)</sup>

輪如は、湛睿不在時の東禅寺で事務をあずかる側近<sup>(8)</sup>である。後半部でてくる「次浦」にはこの寺領の一部があつたことがわかる。次浦は多くの古町栗山川右岸の地にあり（地図A・B参照）、中世は千田庄に属しており、東禅寺の北方に位置する。とすれば、恐らくこの「寺領」とは東禅寺の寺領<sup>(9)</sup>、それも同寺周辺の寺領の可能性が考えられる。その寺領のこと（この書状が書かれた時点ではすでに古大路のあつた場所として、地名化していたと思われるが）、「古大路」に対する新大路にあたるもの

も存在した可能性もあるのではないだろうか。<sup>(10)</sup>

次の悟円書状は、湛睿に宛てて、南北朝期の千田庄における動乱の一

つ、土橋城での合戦を伝える。<sup>(11)</sup>

### 〔史料二〕「悟円書状」

（前文）

並木のふけにて、皆打留候了、不可思議事候之處、千葉侍所、廿七日以大勢、土橋城へ打入候て、朝より及晩影候まで、散々合戦仕候て、土橋城責落候き、城内人々、不及力候いて、敵多打候て、十二人打死仕候了、大嶋よりも、岩部よりも、なにと存候けるやらん、

しりつめも不仕候て、此城被打落て候、並木の城も、如本千葉方より、たてつき候よし承候、以此旨可有御披露候、恐惶敬白、

八月二日

進上  
称名寺御侍者<sup>(12)</sup>

これに登場する、土橋城は東禅寺付近にあつた城と思われ、「並木」「岩部」は、同寺からさほど遠くない栗山川流域に地名が残る（地図A参照）。「大嶋」は、比定地がいくつかあるが、東禅寺より南、やはり栗山川流域の地であつたことは共通する。<sup>(13)</sup>ここで、この時の合戦の状況を下手に説明するよりは、『千葉県の歴史』における同書状の解説を引用したい（括弧内は、筆者による）<sup>(14)</sup>。

攻め手は千葉氏侍所の竹元氏で、攻められた土橋方は栗山川本流と借当川が合流する並木の湿田地帯（「並木のふけ」）で軍勢を止めた。だが二十七日、千葉方は土橋城を陥落させ並木城を再建したのであ

る。近隣の大島・岩部の人々は態度を保留しており、土橋城の陥落は東禅寺僧には衝撃的事件であった。

竹元氏は、匝瑳南条家篠本郷を名字の地とする一族で、並木の南三キロメートルほどの所に、今も篠本という地名がある。遠山氏は、「侍所

竹元氏の軍勢が篠本（光町）を発ち、土橋城（多古町御所台）まで行軍する場合、水路を行くのが一番早い方法である。（中略）河川を行く上で問題となるのは、これを抑える「並木の城」のような「津城」の存在である」と述べ、並木の城も土橋城も、「水運を意識した占地をしている城館」とされる。<sup>(15)</sup>

土橋城での合戦の前後を、書状からさらに推察してみると、千葉侍所竹元氏側の軍勢は、確かに北上して、並木城方向に向かつたと思われる。書状中の「並木のふけにて、皆打留候了、不可思議事候之處」というのは、侍所側の軍勢が「並木のふけ」でとどめられ、それが不可思議ととらえられている。つまり、本当だつたら並木の城まで軍勢が攻めてくるだろうと思われてたのに、あつけなく留められてしまったことが「不可思議」であったのではないだろうか。しかしこのような侍所側の行動は、「廿七日」の行動から計略の一つであった可能性が考えられる。恐らく侍所側は、軍勢を並木方面に発することにより、並木城の注意を南側にひきつけ、その隙をねらつて土橋城に行軍し、同城を攻め落とすことに成功したのではないだろうか。並木城が水路をおさえ城であったならば、篠本から土橋城まで水路で北上するには、並木城を突破していかなければならぬ。「並木の城も、如本千葉方より、たてつき候よし承り

候」とあることから、最終的には並木城も侍所側によつて落とされたことが考えられる。とすれば、まず土橋城が落とされ、土橋城の援軍がない状況で、並木城が落とされたと考えるのが自然ではないだろうか。<sup>(17)</sup> とすれば、侍所側の軍勢は、土橋城まで、水路を避けて陸路で北上した可能性が考えられる。恐らく栗山川を西岸に渡り北上したのではないだろうか。西岸には大嶋城が存在する。「大嶋よりも、岩部よりも、なにと存候けるやらん、しりつめも不仕候て」とあることから、遠山氏は大嶋から後詰が無かつたのは、「侍所方の軍勢に攻撃を受けていた」可能性を指摘している。土橋城が責められた場合、大嶋・岩部からは本来だったら援軍がくるはずだったのであろう。「なにと存候けるやらん」という表現からは、それなのに「しりつめ」もしなかつたというふうに意味にとれ、大嶋が攻撃を受けていたために後詰が無かつたというよりは、先に引用した『千葉県の歴史』解説の「大島・岩部の人々は態度を保留」したという状況のほうがあてはまるであろう。さらに想像をたくましくすれば、侍所と「大嶋」・「岩部」との間には、はすでに土橋城責めの一件に関与しないという密約がとりかわされていた可能性も考えられる。とすれば、大嶋城に遮断されることなく、侍所側の軍勢が栗山川の西岸を北上したことも充分に考えられるのではないだろうか。<sup>(18)</sup>

このように、東禅寺周辺では河川交通だけではなく、陸上交通の存在も史料からうかがえ、東禅寺と各地を結ぶ役割を果たしていたと思われる。次の章では、この東禅寺から香取海へと続く道が存在したことを見定し、その具体的ルートを探つていきたい。

## 二 東禅寺から香取海へ

### 1 東禅寺

東禅寺のある寺作の東は御所台という（地図B参照）。『多古町史』付録石造物等所在図によれば、鎮守の天御中主命神社のすぐ北に「土橋城址」とあり、(二)に土橋城が存在したことになっている。その回りには「城」「御所落」「馬場」「大屋敷」「表テ」等の字があり、いかにも古城、武士の居館があつた場所といえるだろう。<sup>(19)</sup> この「土橋城址」の東には、南北に多古栗源線が通つているが、御所台と西の寺作の間にある道に注目してみたい。同町史には、東禅寺のある寺作における路傍の小祠・石宮などを紹介し説明を加える。それには「大王子様」という項目があり、寺作村と御所台村の村境に、旧多古佐原街道が通ることを説明する。<sup>(20)</sup> そして「貞享元年（一六八四）に両村が境界のことで争つたとき、幕府が裁定を下した絵図面があるが、これによると、この場所に街道をはさんで寺作村に大王子、御所台村に八王子が祀られていることがわかる」と述べる。この貞享元年の絵図は、同町史付録村絵図にカラー写真で掲載される。境界線は墨線で、御所台と寺作の間を南北に引かれ、確かにそとの南北の境界線沿い、西側に「大王子」、東側に「八王子」と書かれる。また、南北境界線沿い、「大王子」の南には御廟の塚といわれる所があり、同町史「御廟の塚」の項目では、鎌倉時代の城郭内とも思われる所で、畑中の平地に板碑ようの一片の石と、供養塔の上部かと思われる石があることが説明される。これらが、実際に鎌倉時代にさかのぼるもの

あるかどうか確認しえないが、村の境界ともなり、王子<sup>(21)</sup>という道と不可分の地名が両脇に残ることから、この南北の道自体、古くまでさかのぼる可能性が考えられる。現在の東禅寺の堂舎や前述した同寺の五輪塔群のすぐ東をはする道であり、この道を利用するにより、井戸山<sup>(22)</sup>から御所台の台地南端を迂回せずに、西古内方面へと北上することができるのである。

以降、東禅寺からこの道を基点に北上していき、中世にさかのぼる石造遺物等から、佐原方面へとつづくるルートを推定していきたい。

## 2 西古内

西古内には愛宕山地蔵院（地図B、2番）<sup>(23)</sup>があり、境内には永徳元年（一二八一）と刻まれる板碑がある。**『多古町史』**によれば、この板碑は「お化け石」の別名で呼ばれるといふ。そのいわれは、むかしこの石は旧佐原街道の字石橋に<sup>(24)</sup>、石橋として架けられていたが、夜になると妖怪と化して通行人に害を及ぼしていたことからといふ。伝承を考慮すれば、石橋に転用されていたものが、最終的に地蔵院に安置された可能性も考えられるが、板碑自体はこの石橋と地蔵院近辺にあつたものと考えてさしつかえないだろう。地蔵院南西の丘陵部を字「新城」といい、これも古い砦跡とつたえられている。寺作のほうから北上して、字「新城」方面に向かい、地蔵院近辺を通過する中世ルートが考えられるのではないかだろうか。

## 3 次浦



b 次浦 永仁3年の板碑

次浦の栗山川支流をのぞむ台地端には次浦城の遺構が残り、その城主は前述した次浦氏の祖とされる次浦八郎常盛と伝えられる。<sup>(25)</sup> 次浦には、浦五郎左衛門」という人物も確認でき、「次浦の故修理助入道殿」の息女である比丘尼が、「駿州」（金沢頃時の子頼実）の子「かう首座」を師匠として衣鉢を受けたことがわかる史料もある。<sup>(26)</sup>

とから、この場所が鎌倉時代までは確実にさかのぼる場所であることは間違いない。永仁三年のものは次浦城南西部の土壘近くに在り（4、写真b）、元応二年ものはさらにその南で出土した（3）。また**『多古町史』**によれば、永仁三年の板碑所在地の北に惣神山永福寺という寺があつたといい、ここにも永徳元年（一二八一）と刻まれる板碑があつた。<sup>(27)</sup>

明治四十一年に県道多古佐原線が開通されるが、同町史はそれ以前の旧街道が次浦をどのように通っていたか詳述する。それによれば、旧街道は西古内の村中を通過して、次浦の惣神神社ま

二万分一地形図（地図B）には、地蔵院の北方から、次浦方面へと北東禅寺から香取海へ——中世のみち探訪——

で通じていたようである。その道は更に北上して、次浦城の東を通り、城の北に東西に流れる多古川の支流（沼田川）を渡り、本三倉まで通じるという。この道沿いには、所々で道祖神、庚申塚が祀られ、二万分一地形図（地図B）にも確認することができる。しかし前述した板碑はこの道沿いではなく、その西に南北にはしる道沿いに点在していた。とすれば、『多古町史』が紹介する旧街道は近世以降に利用された道で、より古く中世にまでさかのぼって利用されたのは、その西側をはしる南北の道であつた可能性が高い。西古内から、次浦に入るまでのルートは中世と近世で重複して利用されていた可能性はあるが、次浦に入つてからは、近世とは別のルートで次浦城までつながつていたということができよう。この城は前述した土橋城や並木城のように栗山川の本流には面していない。とすれば遠山氏のいわれるような、栗山川本流の津城的な城とは性格を異にすることが考えられる。この城の性格を考えるとすれば、ここまで推定してきた南北ルートをおさえる城としての性格が一つに考えられるのではないだろうか。城の北には前述したように、東西に多古川の支流が流れる。この川をさらに西に一・五キロほどさかのぼつていったところの出沼には、正応二年と刻まれた板碑<sup>(34)</sup>（5）があり、次浦城北の東西ルートも中世にさかのぼる可能性がある。とすればこの東西ルートと南北道をさらに北上してみていきたい。

#### 4 谷三倉・元三倉

先に推定した南北道は、次浦城東脇を通り、旧街道の渡河点と同じ場

所で、東西に流れる多古川の支流を渡つたとすれば、その先はどのような道筋があつたろうか。次浦の北、谷三倉には、文永二年（一二六五）と刻まれる、多古町では最も古い板碑が存在する<sup>(35)</sup>（6）。二万分一地形図（地図B）には、次浦の北を渡河して、北岸ですぐ東におれ、再び北において北上し、谷三倉へと向かう道筋が確認できる（地図B上加筆の破線）。この道はまっすぐ谷三倉の稻荷神社へ向かい、そこから北に約三〇〇メートルほどの場所に、前述した文永二年の板碑が在る。とすれば、谷三倉までのこの道筋が、中世それも一二世紀中頃までさかのぼる可能性は高いであろう。稻荷社を過ぎて、西に曲がる道を北上していくば、本三倉へとつながり、ここには東禅寺と密接な関係をもつていたといいう三倉寺とされる西徳寺<sup>(36)</sup>（7）がある。

ここまで、東禅寺から栗山川西岸を北上するルートを推定してきたが、鎌倉時代一三世紀中頃から南北朝期の板碑が確認できるということは、このルートがその時代に利用されたことにもなる。湛睿は嘉曆元年（一三二六）に東禅寺の住持となり、歴応二年（一三三九）に称名寺第三代の長老となる<sup>(37)</sup>ので、湛睿が東禅寺にいる間、この道を利用した可能性は充分あるのではないだろうか。

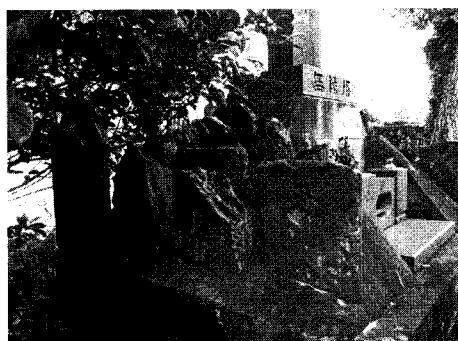
#### 5 多古町以北

本三倉をさらに北上すれば、香取市に入る。それでは多古町以北では、どのような道筋が考えられるか。本三倉の東を流れる栗山川に架かる田倉橋を渡れば、西田部、そこから更に北上して岩部に行くことができる（地図A参照）。西田部には觀応三年（一三五一）とみられる板碑が残

(38)り、岩部は、「史料二」で「大島よりも、岩部よりも」とある岩部である。前述したように、本来ならば岩部から土橋城に後詰めがくるはずだったという認識があり、もし岩部から土橋城に軍勢が移動していたとすれば、これまで確認してきた道筋を利用した可能性もあるのではないか。



c 実相寺の板碑



d 長光寺の板碑

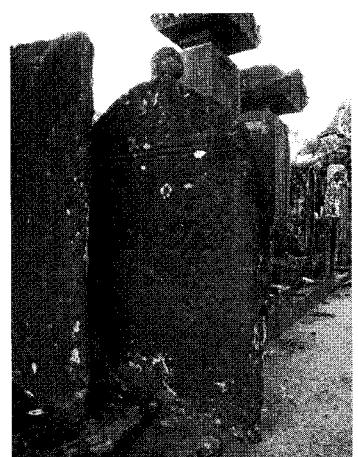
栗山川を渡河せずに、西徳寺（7）から北上すれば、香取市の苅毛に行き、ここには実相寺（8）がある。当寺は近世に日蓮宗不受布施派僧侶の学問所として隆盛を極めたというが、境内には、文字等は摩滅して判読できないものの、板碑（写真c）と思われるものや宝篋印塔の残欠がある。さらに北上していくば、同市荒北に行き、長光寺（9）の墓地では、折れたものが多いが、複数の板碑（写真d）を確認できた。文字は判読できなかつたが、この中には正応三年（一二九〇）銘のものもあ

るとい。(39)う。ここから、さらに北上していくば、福田を過ぎて同市本矢作となる。当地は千葉氏の国分氏が居城をおいた場所といい、当地の知足院（10）は、国分氏の本拠があつた頃の菩提寺であつたともいう。(40)当寺には、やはり複数の板碑（写真e）を確認でき、中には康永元年（一三四二）在銘のものもある。また当寺の前には、車一台ほどがやつと通れることのできる、南北道も確認することができた。本矢作からさらに北上したところの大根には正暦元年（九九〇）創建と伝える西藏院（11）がある。当寺には

徳寺一年（一二三〇七）をはじめとする複数の板碑<sup>(41)</sup>（写真f）が確認でき(42)る。そしてこの西藏院から北上した牧野に、觀福寺（12）が在る。同寺には、嘉元三年（一二三〇五）在銘を最古とする三〇基の板碑が確認されてい(43)る。現在の佐原河港は、ここから一・五キロほど北と近い。佐原周辺には井戸庭・佐原・閔戸等の津が並んでいたことが海

院には、やはり複数の板碑（写真e）を確認でき、中には康永元年（一三四二）在銘のものもある。また当寺の前には、車一台ほどがやつと通れることのできる、南北道も確認することができた。本矢作からさらに北上したところの大根には正暦元年（九九〇）創建と伝える西藏院（11）がある。当寺には

徳寺一年（一二三〇七）をはじめとする複数の板碑<sup>(41)</sup>（写真f）が確認でき(42)る。そしてこの西藏院から北上した牧野に、觀福寺（12）が在る。同寺には、嘉元三年（一二三〇五）在銘を最古とする三〇基の板碑が確認されてい(43)る。現在の佐原河港は、ここから一・五キロほど北と近い。佐原周辺には井戸庭・佐原・閔戸等の津が並んでいたことが海



f 西藏院の板碑



e 知足院の板碑

夫注文<sup>(44)</sup>によりわかり、前面に広がる香取の内海を通じて、常陸等など各地を結ぶ拠点となり、室町時代には町場が形成されていた。<sup>(45)</sup>

以上多古町以北の南北ルートを確認してきたが、その道筋には中世の痕跡を確認できることから、佐原方面へ、そして香取海から各所へ通じる一つのルートが、以上みてきた場所をたどった可能性が考えられるだろう。

### おわりに

本稿では、東禅寺と香取海をつなぐ一ルートの検討のみとなってしまったが、当然、東禅寺と各地を結ぶ道がこのルートのみであつたわけではない。同寺が房総内の寺々と交流し、称名寺領の年貢輸送と密接な関係があつたことを考えれば、それら各地との間を結ぶ交通はいくつも存在しただろう。当寺にのこる苦むした五輪塔群以外には、当時の隆盛ぶりは、もはや見ることはできないが、東禅寺を支えていたこれらの交通を一つ一つ明らかにしていくことによつて、東禅寺がここに存在した意味について考えることを今後の課題としたい。

取り交わす間柄の人物。

(6) 例えば、「つちはしのちやうらうの御かた」(『千葉』九六号、「某書状」とあるのは、東禅寺の長老をさし、「土橋知事」(『千葉』二〇四号、「東

禅寺知事某書状」とあるのも、東禅寺知事をさす。

(7) 『千葉』三四一号。

(8) 前掲注(2)『学僧湛睿の基』四八頁。

(9) 東禅寺領については、『千葉』武本為訓氏旧蔵文書三号「某書状・湛睿書状草案」に、「土橋東禅寺寺領悉令相違候、不斷失食之間」とある。この書状がだされた年代はわからないが、寺領の相違により、当時東禅寺が経済的に困窮した状況を伝える。

(10) 東禅寺は阿弥陀如来を安置し、土橋阿弥陀院と号していたらしく(『多古町史』上巻(一九八五)四九九頁参照、なお以降同書を『多古』のように略記する)、この「阿弥陀」自体、東禅寺の阿弥陀堂をさす可能性もあるかもしない。

(1) 一九九二年。

(2) 神奈川県立金沢文庫企画展図録『学僧湛睿の軌跡』(二〇〇七年)等参照。

(3) 『千葉城郭研究』四号、一九九六年。

(4) 前掲注(3)。遠山氏は、船渡地名や金沢文庫文書中の史料により、東禅

寺からその北の苅毛までの栗山川水運があつたことを想定し、苅毛から陸路を北上して「他水系(常陸川)へとつながる水陸交通体系の一環をなしていた」と述べられる。

(5) 湛睿著書『起信決疑抄』紙背文書、同書には、惠釦書状・唯寂書状・某書

状(『千葉県の歴史』資料編中世4掲載金沢文庫文書一五八・一五九・一六〇号、なお以降金沢文庫文書中の史料は、同書掲載の号数に従い、『千葉』(○号のように記す)の紙背文書もある。光明院(千葉)の惠釦は建武三年に湛睿からの書状を受け取り、その行間に返事を書き記し送り返す

(『千葉』一四八号、「湛睿書状・惠釦勘返状」)等、湛睿と書状を何度も

してこの合戦を歴応年間に起こつた出来事とし、第一・二次が千葉介方と千田氏、北朝方と南朝方という対立構造であったのとは異なり、竹元氏と中村氏との私的レベルでの緊張が主要な原因であったとされる。(建武期千田庄動乱の再検討——下総国における南北朝内乱の展開をめぐつて——、「千葉史学」三三号、一九九八年)。なお、千田庄を舞台に、千葉大隅守(千田)胤貞と、千葉介貞胤との間に起きた、在地武士を巻き込む動乱についての研究として、小笠原長和氏と千野原靖方氏等の研究を紹介し、両者の研究の要点を整理されている。

(12)『千葉』三三四号、なお同書福島金治氏の解説によれば、本文書は、歴応二年(一三三九)に称名寺住持となつた湛睿の『隨自意抄』の紙背文書で、「進上 称名寺御侍者」という宛先から湛睿の称名寺長老就任後と確認でき、歴応二年以後のものと説明される。

(13)前掲注(3)一三頁参照。

(14)前掲注(12)、福島氏解説。

(15)日本歴史地名大系『千葉県の地名』(平凡社、一九九六年。なおこれ以降、同書を『地名』と略記する)「篠本郷」の項、及び前掲注(11)遠山氏論文参照。

(16)前掲注(3)補注3等参照。栗山川と借当川の合流点の湿地帯(「並木のふけ」)での戦闘いでた並木城からの軍勢は船であつた可能性も指摘されている。

(17)並木城、土橋城という順番で落とされた可能性もあるが、それだと並木のふけで不自然にも、侍所側の軍勢がとどめられた意味がなくなつてしまふのではないだろうか。

(18)本稿は、東禅寺周辺の陸路の存在を検討するものだが、遠山氏が明らかにされた中世における栗山川水運(前掲注(3))を否定するものではない。

悟円書状に「並木の城も、如本千葉方より、たてつき候」とあるのは、並木の城が元々は千葉方(侍所方)であったのを、土橋城に拠つた主体によって、奪取され、それを元のように千葉方が取り戻したという意味になる。土橋城は栗山川の西岸、並木城は東岸にあることから、両城が敵方にあることは、この一帯の栗山川水運をほぼおさえられてしまったことを意味するともわれる。恐らくそれは、千葉方にとつては早急に回避すべき状況であり、そのため陸路を利用した土橋城責めが行われたと考えられるのではないかだろうか。

(19)石井進「下総国千田荘(上)」(『石井進著作集 第八巻』所収)は、天御中主命神社には元々妙見社がまつられていたこと、千葉氏の一族であれば「御所」と名乗れたはずで、妙見社を信仰する千葉一族の居館のあととみてさしつかえないだろうとされている。

(20)前掲注(10)『多古』(五〇七頁)参照。但し、同町史にはこの村境ともなつてゐる旧多古佐原街道を東西に通ると説明するが、後に述べる貞享元年の絵図や、同町史付録の石造物等所在図をみても、同村境は南北である。

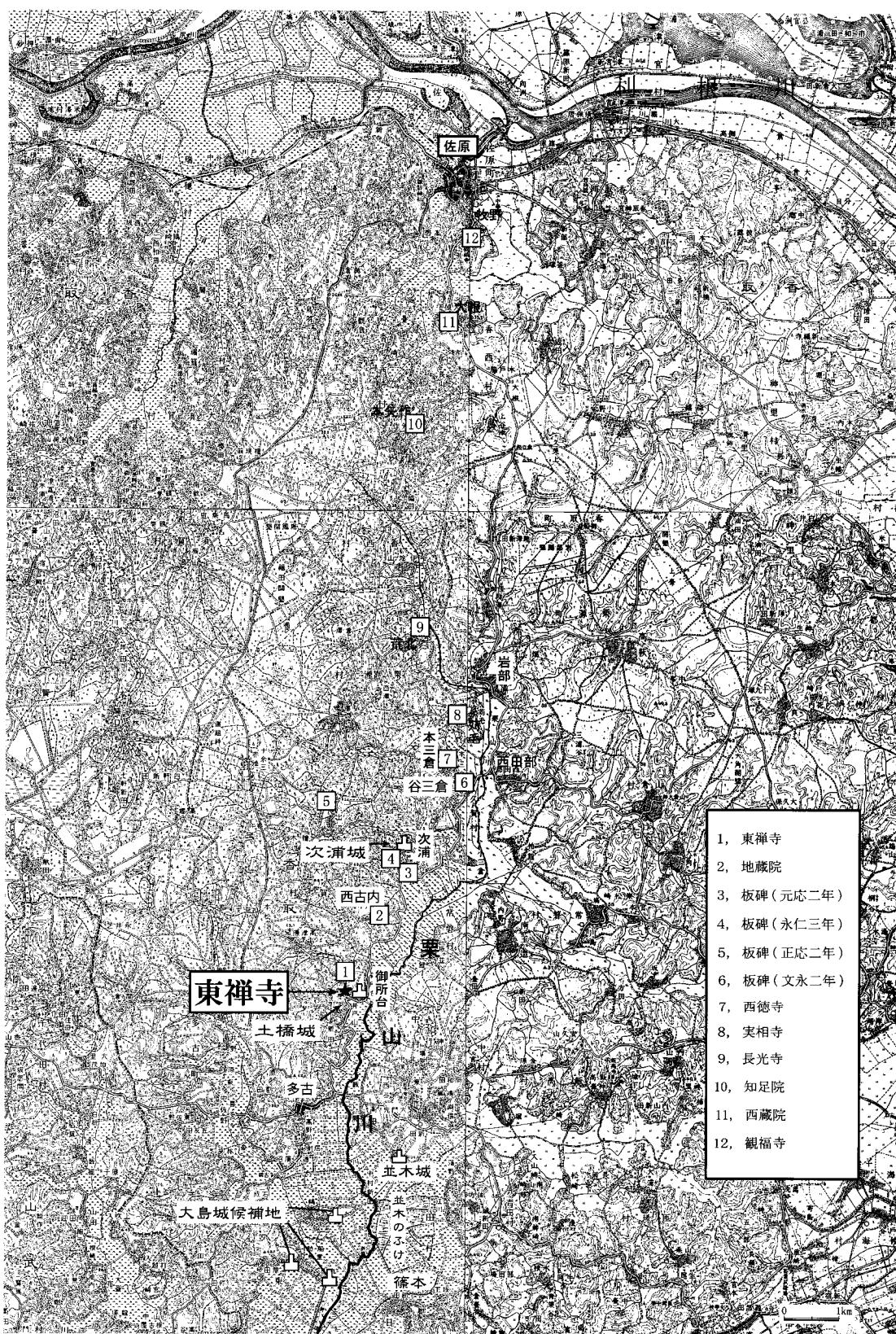
恐らく、東西ではなく南北の間違えではないだろうか。

(21)例えば、中世熊野信仰がさかんとなり、その熊野詣で利用された熊野街道の所々には王子が勧請され、道しるべ、休息の場となつていて。このことらも、王子は道と不可分の関係をもつていてと考えてもさしつかえないだろう。

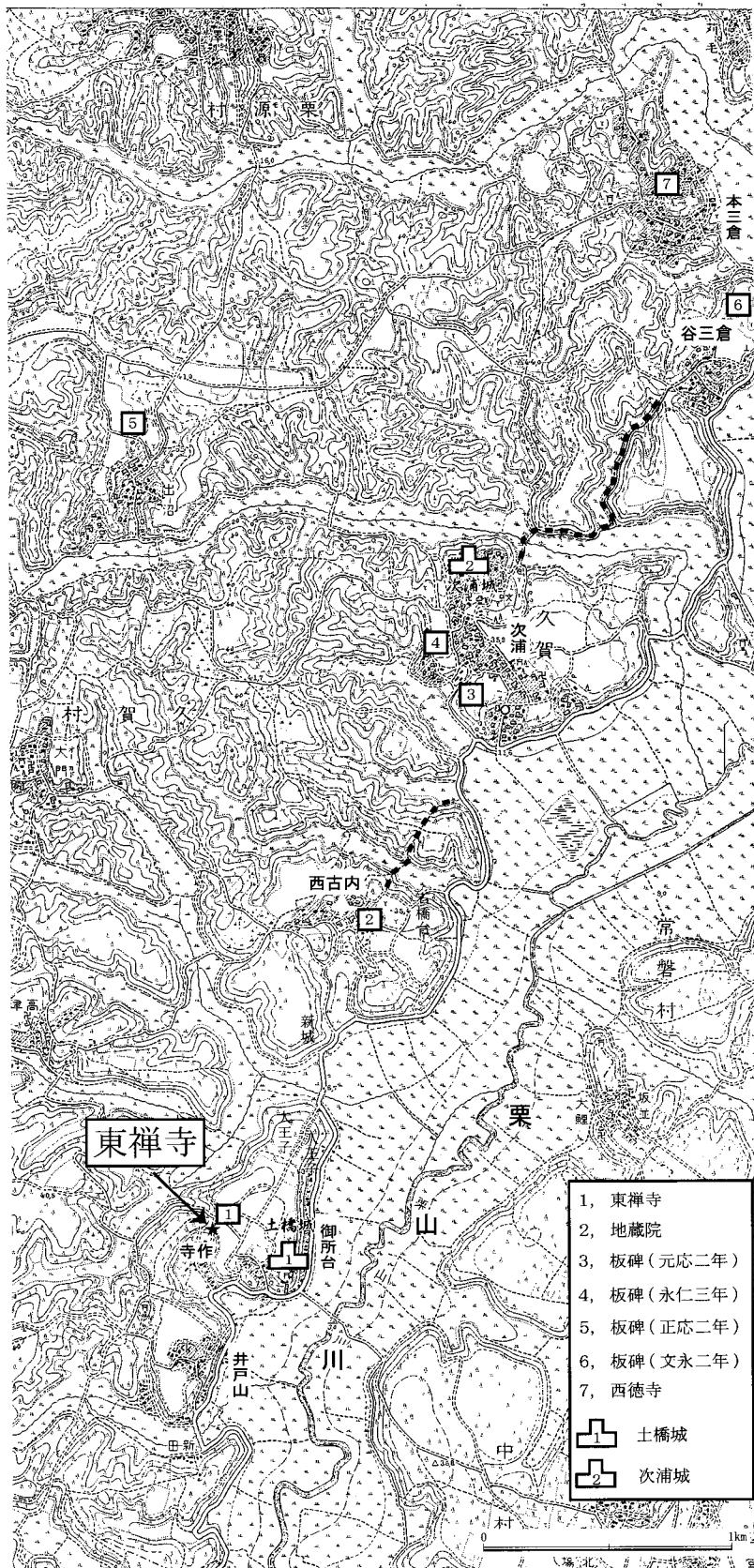
(22)東禅寺では、元弘三年八月二十日、九月五日に、それぞれ「次浦殿百日」「井戸山入道百日」法会が営まれている。八月三十日から百日かかるのと、五月二十一、二日ごろ、つまり幕府が滅亡した時期と重なる。次浦氏は金沢氏とも縁が深く、そのことから『多古』(前掲注10)は次浦氏が金沢氏に従つてそれに殉じたと推定している。そして、井戸山入道百日は、

- 次浦殿に五日遅れているが、これも戦傷死ではなかつたかとする。このようには、鎌倉末期には、井戸山に東禪寺と関係をもつてゐた武士が存在し、金沢文庫文書にも「井戸山」が登場する（例えば、『千葉』二七六号、某書状）。
- (23) 地図 A・Bともに、番号が示す場所は共通。以降本文中、地図の番号は(1)のように記す。
- (24) 『多古町名所百選』多古町教育委員会、一〇〇六年。
- (25) 前掲注(10)『多古』四二五頁。
- (26) 地蔵院の東に「石橋台」という字がある。
- (27) 前掲注(10)『多古』四二五頁。他にも「御廟崎」の字がある。また西古内には、紀年銘は磨滅して読めないものの、地蔵院に完形のもの一基、菅澤平右衛門家裏の池畔に一基の板碑、薬師様境内にそれらしき断片があるという。
- (28) 大日本帝国陸地測量部作成、明治三十六年測図同三十九年製版。
- (29) 『千葉』三一五号、六月十日付。他にも『同』一五五号「某書状」に「つちハしつきうらの」と記される。前掲注(22)も参照。
- (30) 『千葉』一七五号、「湛睿書状」（湛睿の『注法界觀釈文集』の紙背文書）。なお、小笠原長和「建武期の千葉氏と下総千田荘」（『史觀』六五・六六・六七合冊、一九六二年、後に『中世房総の政治と文化』吉川弘文館、一九八五年に再録。）も、この書状を紹介するが、氏は円秀から湛睿に宛てた書状とする。書状の全文を左に引用する。
- 此間何条御事候哉、御出之後、未承候、恐鬱不少候、抑雖不思懸申状候、次浦の故修理助入道殿之息女比丘尼、先年被受衣鉢候ける、師匠へ、先代甘繩の駿州之御息かう首座とて、世上転変之折節へ、東勝寺長老にて被坐候けるなる、然自彼比丘尼方擧一人之女性、彼のかう首座ニ、同
- (31) 椎名幸一「次浦城について」『千葉城郭研究』一九九二年。
- (32) 多古町教育委員会戸村勝司朗氏のご教示により、板碑の存在・位置を確認することができた。改めて御礼を申し上げたい。  
(後欠)
- (33) 前掲注(10)『多古』三九九頁。なお、元応二年の板碑が出土した場所と同じかは確認できなかつたが、その近辺と思われるこそじ墓地からも「貞和二年」（一三四六）と刻まれる武藏式板碑が発見されたということである（四〇三頁）。
- 前掲注(31)椎名幸一「次浦城について」は、主郭の西南に接して出耕形状の土塁が確認できるとされ、永福寺跡はこの近辺にあつたものと思われる。
- (34) 出沼の熊野山東光寺北に、村の鎮守熊野神社があり、板碑は同社にある  
(前掲注(24)『多古町名所百選』)。
- また、前掲注(10)『多古』（三九九頁）によれば、次浦の玄龍塚は出沼にむかう街道沿いで、これは成田参詣道でもあつたという。
- (35) 前掲注(24)『多古町名所百選』によれば、谷三倉九〇五番地の五一に在る。正確な所在地は多古町教育委員会戸村氏のご教示をいただいた。改めて御礼申し上げたい。
- (36) 前掲注(10)『多古町史』（一一三頁）。なお、三倉、三倉寺に關しての史料は、『千葉』一二五号「等印書状」に「今度動乱已後、寺中無別子細候、但三倉寺領事」とあり、二九一号「某書状」に「つちハシの御寺そうちせう々々ミくらへ御出候なとき」急候」とある。
- (37) 前掲注(2)『学僧湛睿の軌跡』本如房湛睿年譜参考。

- (38) 『地名』西田部村の項。
- (39) 『地名』荒北村の項。
- (40) 『地名』本矢作村の項。
- (41) 『佐原市史』(佐原市役所編、臨川書店、一九六六年、九二頁) 参照。他に  
延文三年(一二五八)在銘のものもある。
- (42) 『地名』大根村の項。
- (43) 『地名』觀福寺の項。前掲注(41)『佐原市史』。
- (44) 「香取大祐宜家文書」(千葉縣史料中世篇香取文書)一二一八号以下)。
- (45) 『地名』(六九六頁)。
- (46) 例え、遠山氏は前掲注(3)の論考で、東禅寺のある寺作から台地状を  
高津原、前林、大慈恩寺、神崎へと通じる道があることを紹介している。
- 〔付記〕なお、本稿は、財團法人高速道路交流推進財團による「日本の道の歴史」  
体系化事業研究成果の一部である。



(地図A) (五万分一地形図に加筆。一部、遠山成一「中世房総水運史に関する一考察」をもとに加筆。)



[地図B] (二万分一地形図に加筆。)